

メディア産業論から視聴覚リテラシーへ

- 『情報メディア論』における映像・Web教材の利用と課題 -

From Media Industry Theory to Media Literacy Education: A lecture note in the course of "Theories of Information and Media" -

旧カリキュラムにおける『情報メディア論』が終了するのに伴い、2年間の講義実践を振り返り、教育のメディア利用に関してのノウハウを体系化する。とりわけこの科目は、隠れたカリキュラムとしてメディア・リテラシーの向上を目指し、そのことが予想外に学生の支持を得たので、大学教育における当該分野の教育法を体系化してゆくための一定の知見を提示しておきたい。

1. はじめに

著者は2000年度本学部に赴任したときから、『情報メディア論』を担当することになった。それまで地域社会学の研究者として自己形成をしてきたので、これは全く専門外のことであり、にわか勉強をしながら試行錯誤の連続だった。しかし、2年目の授業を終える時期になって、情報メディア論という授業の内容としても、社会情報学部における授業の形としても、ようやく一つのモデルが見えてきたと思えるので、その実践を報告し、学生の感想なども適宜引用しながら、本学部における教育方法の成熟にむけた素材を提供したい。セメスター制度の段階的導入に伴い、『情報メディア論』は2002年度から「電子メディア論」と「現代メディア論」に分割され、筆者は後者のみを担当することになって、通年での講義は2001年度で終了ということからも、一つの区切りである。またこの講義はVTRを初めとするメディアを多用したことから、視聴覚・デジタル教材の活用方法についても一定の知見を提示し、教育方法に関する議論の素材とすることができるだろう。文部科学省メディア教育開発研究センターの調査からは(坂元監修, 2001: 54) 実に86%の大学で録画ビデオが授業に「よく使われている」にも関わらず、個別分野において、ビデオを初めとするマルチメディアの具体的利用法に関する議論は少ない。早い段階から「社会学教育法」の講座が成立していたアメリカと比較すると、日本の社会科学はこの分野についての取り組みを怠ってきたのではないか。

そこで本稿では、まず各種メディアの利用法をはじめとする形式面での実践について2節(映像教材の利用)および3節(Web教材の構築とフィードバック)で触れ、内容面での成果について4節(メディア産業論とメディア・リテラシー)で触れる。なお、学生の感想を引用するときには 印で示すことにする。

2. 映像教材の利用

『情報メディア論』は初年度からシラバスにおいて、映像素材を多く利用することを予告し、また利用する VTR についても、ある程度探索し準備をしておいた。ただし著者は当初、ほんの補助教材のつもりでいたので、2000 年度前期は基本的に講義形式とし、2000 年度後期から本格的に VTR を利用しはじめたのだが、これが予想外に学生の支持を得た。2000 年度終了後に学生自治会が行ったアンケートでは「ビデオをたくさん見るのが楽しい」「映画などのおもしろい資料がみれた」(ママ)というような声が聞かれる。また授業自体への評価も、前期と比較して格段に良くなっている。

急いで付け加えておけば、私はこうした反応に満足しきっているわけではない。VTR 利用は、いうまでもなく教育にとって両刃の剣である。VTR を使っているとき、教師は何をしているのかが問われる。また、学生たちの反応を裏返して読めば、視聴覚刺激に対する反応が相当ナイーブであるという問題や、そもそも文章を読まない結果として視聴覚教材にしかリアリティを持った反応ができないという問題を発見できる。

ともかく 2000 年度後期からの 3 シーズンにおいては、2 週に 1 回 60 分程度、比較的長い映像を見てもらうことを基本とするようになった。短い VTR を細切れに何分かずつ見てもらうこともあったが、経験的には一定程度長いものを集中して見てもらうほうが、授業の組み立てもやりやすく、受け手の学生も教師の意図を読みとりやすいようである。また VTR 素材の垂れ流しを避けるために必ず課題を提示して、その課題への回答を準備するために VTR を見てもらうことにした。自由に感想を書きなさいというよりは、このように特定の視角や切り口から課題を指定した方が学生も書きやすいようである¹。2 年間に示した課題の一部を表 1 に整理した。このほか、所沢ダイオキシシン報道や湾岸戦争報道なども取り上げている。こうして課題を示し授業後に回収したのち、翌週の授業で代表的な感想をハンドアウトとして渡してフィードバックする。さらに、原則として全員分の感想が Web 上に掲載される。そのことが学生にとって励みになるという側面があり、『情報メディア論』のページへのアクセスは 1 年半で 1400 件以上にのぼった。

表 1 2000-01 年度『情報メディア論』VTR 素材と、視聴時に示した課題の一部

素材	2000 年度	2001 年度
『ムスタンの真実』(1992・NHK)	10 月 16 日(第 17 週) 「やらせ」または演出の可能性が ある点はどこか。	4 月 26 日(第 3 週) 「やらせ」と疑われるのは どの映像か。編集の上で見 られる特徴はどのようなも のか。

『破線のマリス』 (2000・破線のマリス製作委員会)	10月23日(第18週) 遠藤とテレビ局がルールを破っている点はどこか。	5月24日(第6週) 主人公はジャーナリストとしてどこでミスをしているか。政治・行政と放送局との関係はどのようなものとして描かれているか。
『民族の祭典』 (1936・ドイツ)	9月25日(第15週) どのような映像技法が使われているか。それがナチスの宣伝として役立っている部分はあるか。メディア・イベントとして、現代とどちらが成功しているか。	9月27日(第15週) この映像はナチスの宣伝として成立しているか。特徴的な映像技法・演出方法、伝えているメッセージは何か。
『クイズ・ショウ』 (1990・アメリカ)	10月30日(第19週) この事例は「やらせ」だろうか。	5月17日(第5週) 自由に感想を。
『映像の世紀・ベトナム』 (1996・NHK)	11月13日(第21週) アメリカの世論を変えた映像はどれだと思うか。アメリカは、この事例から何を学んだのだろうか、あるいは学ばなかったのだろうか。	10月11日(第17週) ベトナム戦争とアフガン戦争を比較して、共通点と相違点を書きなさい。
『記者たちの水俣病』 (2000・熊本放送)	12月18日(第25週) この事例からくみ取れる教訓は何か。	12月13日(第25週) この報道は、マスメディアに対してどのような教訓を残しただろうか。
『サンデープロジェクト』 (2000・テレビ朝日)	11月27日(第22週) 政治家は、イメージの演出やレトリックについてどのような工夫をしているか。局および司会者はどのような方向付けをしようとしているか。	11月15日(第22週) 加藤氏がイメージの演出に失敗している点はどこだろうか。

VTR教材の利用にあたって痛感したことは、教材によりかかるのではなく、教師が主体となってビデオを編集しその意味づけを明瞭にすることの大切さである。VTRに幼児のおもりをさせることが良くあるが、それに似た意図のはっきりしない利用は学生に不信感を与える。一時期注目された『ビデオで社会学しませんか』(山中編, 1993)という教科書が結果として利用されていないのも、こちら辺の事情が関係しているように思う。

一方で適切な素材を選べば、隠れた効用があることも分かった。一つは古典的な映像素材を通じて、ある種の教養を身につけてもらうことができる、ということである。表1に

示した素材のうち、ベルリンオリンピックの斬新な記録映画として知られるレニ・リーフエンシュタール監督『民族の祭典』、1950年代アメリカ三大テレビネットワークで起きた Quiz Show Scandals (有馬, 1997) を取り上げた R. Redford 監督『クイズ・ショウ』などは古典としても優れた素材であるが、これら映像を見たことがある学生はほとんどいなかった。われわれの世代では、こうした教養は各自が学校外で身につけるべきものだったが、文章の古典と同じように映像の古典も大学で紹介すべき時代になったのかも知れない。

『メディア・リテラシー入門編』(鈴木, 2000: 26-27)でも、「ファシリテーター/教師は日頃から新聞、テレビ、雑誌、インターネットなどのメディアに注目し、スタディガイドの各章で利用できそうな記事や資料を探し出し、保管、録画しておく」ことが必要とされている。私は毎朝新聞のテレビ面をくまなく確認し、少しでも授業に使えるような番組があれば録画予約しておくことが習慣となった²。そのため私の研究室は100本以上のビデオテープで溢れている。これをデジタル化し整理する作業を2002年春から開始したが、この作業が完了すれば授業意図に沿った形で映像を編集しつつ提示することができ、授業展開がよりスムーズになると考えている³。

なお、講義者自身の反省のためにも最新のメディアは効果的である。私はICレコーダーで毎回の講義内容を録音し、授業後に聞き直すことにしている。自分のしゃべり方が予想以上に早いとか、同じことをくり返ししゃべっていると、言明の根拠が薄いなど、結構気づくことが多いものである。ちなみに、現在の教室システムではマイク音声を録音する手段がなく、録音状態があまり良くないが、D館に導入される新システムでは改善されるとのことである⁴。

ところで、情報メディアをこのように多用すると、何らかの事故により教室の機器が利用できなくなったときに手も足もでなくなるというリスクを抱えることにもなる。2002年最終回の授業では、教室の機器が一切使えなくなり肉声とハンドアウトのみで授業を行ったが、こうなると話の内容によって学生が退屈したり興味を示したりする様子が、改めてよく分かった。やはり最終的には古典的な授業形態のなかで学生を引きつける技量を磨くことが基本だと痛感した。

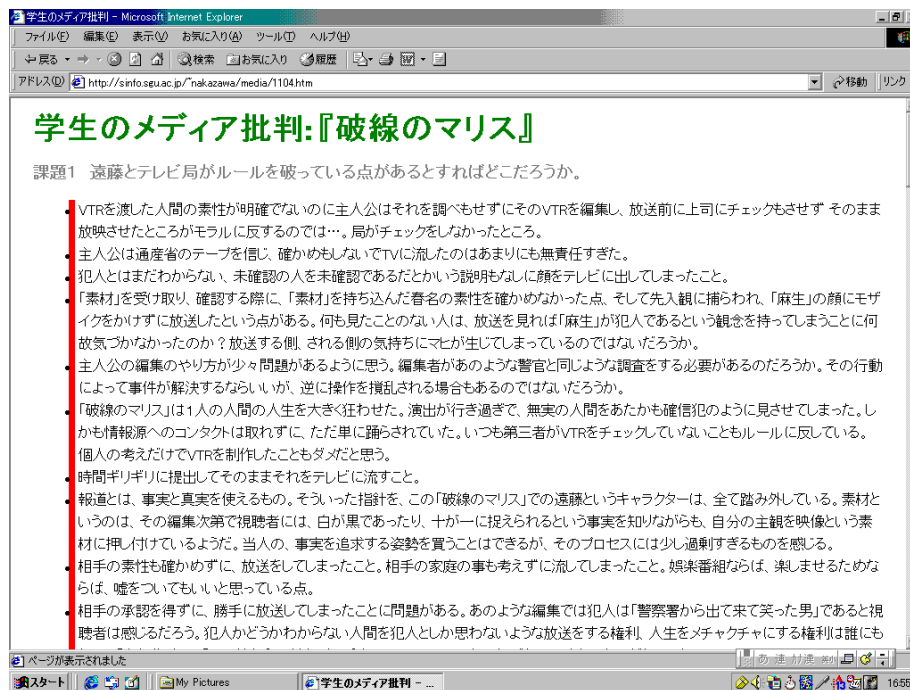
3 . Web 教材の構築とフィードバック

次に、Web の利用方法について取り上げる。授業で Web を利用することには、いくつかのメリットが考えられる。情報技術による合理化・労力節約の効果をあげられる(たとえば個別に相談に応じるより、掲示板の利用を周知徹底したほうが全体に連絡事項が行き渡るなど) 授業時間外でも学生の学習を支援するとか、学生からのフィードバックを実現できる より広い範囲の人々のコメントや反応を期待できる。また授業内容を Web 上の別の情報資源とリンクできる、というような点である。

しかし にはシステムを構築する手間がかかり、また掲示板なども予想外に利用されな

い。も少しずつ効果が現れてくるものの劇的な効果は期待できない、というようなことがあり、当座のところ最大のメリットはやはり である。双方向性を確保しつつ教師が手軽に情報発信できるということである。私の場合には、授業後に回収した感想を一週間以内にフィードバックする手段として Web を利用した。自腹を切って学生アルバイトを雇用し、感想カードのうち目についたものをパソコンに入力してもらうことにしたのである。これが Word 文書で仕上がると即座に Web に掲載した。Word 文書を html 形式で保存することは簡単なので(ただし Word が生成する html は無理が多いので、欲をいえば html を書き直すのが望ましいのだが)、それほど時間はかからない。

図 1 学生からの感想を載せた Web ページ

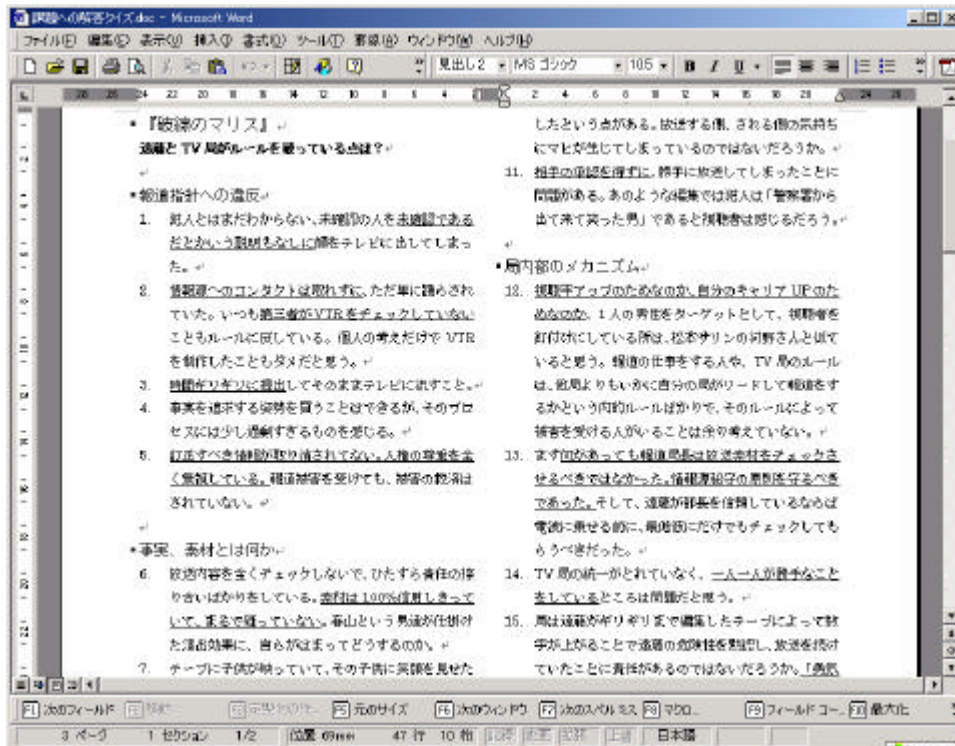


出所: <http://sinfo.sgu.ac.jp/~nakazawa/media/1104.htm>

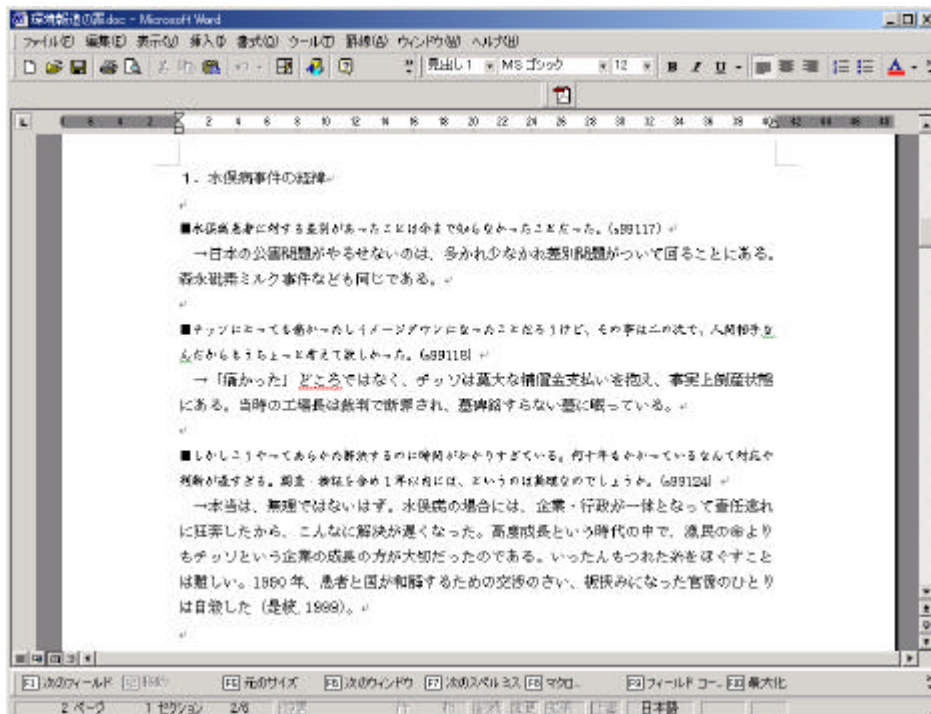
こうして Web に掲載した感想は縮約してハンドアウト化し、次回の授業で配布した⁵。これら学生からの感想をフィードバックする方法には、もっとノウハウが積み重ねられて良いだろう。私なりに試行錯誤を凝らしてきたが、典型的なハンドアウトを図 2 にあげる。

図 2 フィードバックする感想の例

A. 2000/11/6 配布資料



B. 2001/12/13 配布資料



感想をいかに分類し授業展開に結びつけていくか、これについては幾つかの方法論があり得る。図 2-A のハンドアウトの場合には、授業の最初に前回の感想についてコメントし、

その後はオリジナルな授業をしていくという展開になる。しかし授業展開の中で適宜学生の感想に言及していく方が、学生の興味を引きつけやすく、多様な解釈を実感させるメディア・リテラシーの観点からも望ましいようだ。それを実感したのは、2001年度25週目に水俣病とメディアを扱った授業であった(図2のB)。この授業では、水俣病報道にうかがえる教訓について書いてもらった感想を整理し、それを専門用語に置き換えて再説明するという手法をとった。社会科学に何が出来るかを示す上でも重要な回だったと思う。学生の感想に次のようなものがあったが、これは授業の隠れたメッセージがきちんと伝わったという意味で、最大の誉め言葉だと思っている。

個人のせいにするのではなく、システムをうたがうべきだという言葉が心に残った(2001年度最終回の感想、3年男)。

受け手の反応を織り込んだ授業展開が、学生の興味を引きつけやすくなったのだろうと思う。ただし、この方法は毎週の教材作成に大変な労力を要することになるので、毎週このように展開することは難しいだろう。

ところでWebの利用法としては、授業の内容を発信するだけでなく、他のWeb素材を利用することも重要である。効果的に利用すれば、最新の出来事に言及できるという利点がある。2001年度後期の授業では初回に米国同時多発テロ事件に関連するWebサイトを紹介したが、これは後述するように授業後の反響が大きかった⁶。具体的には、World Trade Centerのサイトや「2ちゃんねる」の話題になったスレッドなどを紹介したのだが、このように即時性という特徴を適切に利用できれば授業効果が高まるといえる。

Webを利用する際、留意すべきことはいくつかある。ブロードバンドコンテンツはインターネット接続した状態でしか流すことができないので、やはり教室LAN環境が整備されていることは必要だと痛感した(『情報メディア論』は大教室だと私語が増えるタイプの授業なので、LAN環境のあるE館ではなく、B館の小さい教室を使っていた)。たとえば2000年度後期の授業のうち、いわゆる「加藤紘一の乱」ないし「加藤政局」を取り上げた回がある。周知のように「加藤政局」とは、当時の森政権に対して反旗を翻した加藤衆議院議員が、野党の提出する内閣不信任案に賛成するとして、11月10日から20日まで新聞やテレビに出演し改革を訴えた事件である。この間国民の関心は高く、とくに加藤紘一氏がインターネット上に持っていた掲示板サイトには書き込みが殺到した。しかし自民党橋本派などの猛烈な切り崩しにあって孤立無援となった加藤氏は結局、11月20日深夜の本会議には欠席して乱は失敗に終わった。このような経緯から、やはり加藤紘一氏のサイトにあるストリーミングコンテンツが教材として不可欠と思われたので、苦労して全情報をバッファしてから教室でパソコンから動画を流した。ちなみにパソコン音声を教室に接続することもできなかったため、パソコンのスピーカーからの音を教室マイクに拾わせた。この回に使用した素材は「乱」が失敗に終わったあとの2000年11月25日、加藤氏自身が支持者やネット上の書き込みなどで応援した人々に向け、経緯を弁明したquick time movieである(http://www.katokoichi.org/agenda/jikyoku_index13.html)。これを聞いている

ときの教室は水を打ったように静かになった。

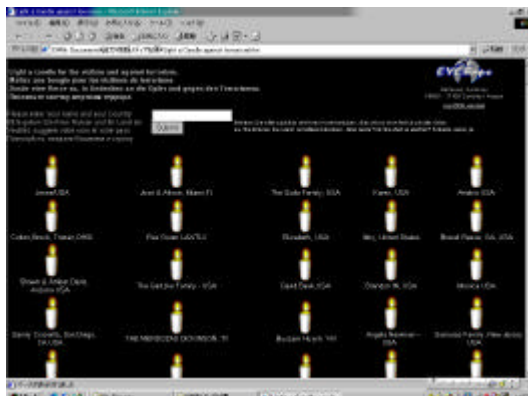
パソコン画像を見ているとき、教室が静かになりましたね(4年男)。

「加藤はインターネットという満天の星を見上げて歩いているうち、ドブに落ちた」と評している政治家がいるが⁷、ともかく政治とインターネットが日本で最初に結びついたこの出来事は、事態の進行と同時並行的に授業で取り上げたこともあって、学生に強いインパクトを与えたようである。

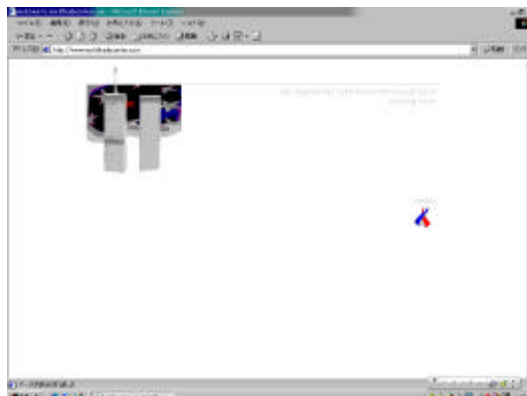
このように授業で臨機応変に Web 教材を利用するためには、教員は重要な Web ページを見つけたら、すかさず保存しておくことよい。コンテンツが動的に変化することが Web の特性だからだ。先述した同時多発テロ事件の場合、事件直後から worldtradecenter.com のサイトはドイツに自動転送され、犠牲者に弔意を示すキャンドルを点灯することができた(図3)。新メディアによる希望を示すものとして、このサイトを 2002 年度後期最初の授業で紹介し、「私もアクセスしました」など学生からの反響も大きかった。しかし、その後いたずらの多発によりこのサイトは一週間程度で閉鎖されてしまった。また、新聞各社のサイトにあったニュース写真のなかに、world trade center の高層階から飛び降りる人々を捉えた AP 通信社の写真が掲載されていて、あとで報道倫理上問題になると考え保存しておいたが、やはり一日で削除されてしまった。結局、この写真は生々しすぎるので授業では見せていないし、気づいた人がどのくらいいるのか分からないが、あまり話題にならないまま今日に至っている。キャプチャしても授業で提示できるくらいで Web に掲載するなど永続的な利用ができない。しかし、こうした瞬時性・一過性もまた、インターネットの特性であるから、その意味でも貴重な教材であろう。少なくともメディア論的な授業を担当する教員はリアルタイムでインターネットの世界に何が起きているか把握できるだけの情報源を持ち、アンテナを張り巡らしておく姿勢が必要である⁸。

図3 事件直後と現在の worldtradecenter.com

A. 事件直後



B. 現在 (2002年3月)



出所: <http://www.worldtradecenter.com>

4. メディア産業論とメディア・リテラシーの認識論

これまでは授業の形式的な面について、実際的な経験をまとめてきた。次に講義の内容面についてであるが、試行錯誤のなかで、2つの柱が見えてきた。北海道におけるメディア産業論の意義を問い続けるということが1つ、メディア・リテラシー教育の大学における実践方法を追求するということが2つ目である。この二つの組合せは、札幌学院大学という特殊性のなかで成立する授業内容ではないかと考えている。

4.1 メディア産業論と北海道

筆者の得意分野からいって、この授業を一種のメディア産業論として展開するのが望ましいというのが赴任当初の私の発想だった。じっさい、標準的なマス・メディア論の教科書は、新聞・出版・放送・広告などの業態ごとに、資本・会社系列・技術的バックグラウンドなどの業界構造について概説し、その課題と問題点を指摘するという構成をとっている（たとえば、後藤，1999 など）⁹。しかし、この目論見のもとに体系的な教材を準備して教壇に立ってみると学生の反応は鈍く、変更を余儀なくされた¹⁰。取次会社の仕組みやテレビ局の全国ネットワークなど、私自身が面白いと思うことを説明しても学生は騒がしいばかりだった。1年目で本学における「状況の定義」がつかめなかったこともあり、このとき私は相当追いつめられ、後期に新しい糸口を発見するまで辛い思いをした。いま振り返ると、これまでのメディア論は、メディア・エリートの視点で組み立てられたものであって、受け手に止まる地方の学生にとってリアリティの持てるメディア論ではなかったということなのだと思う。

翌年は、いきなり教科書的な解説をするのではなく、テレビ局の制作現場を舞台にした『破線のマリス』という映画（2000年、「破線のマリス」製作委員会）を見てテレビ製作の現場について実感を持たせてから、とくに地方放送局の今後という点に焦点を当てながらテレビ産業論を展開すると、学生たちは熱心に聞くようになった。このように地方から見るテレビ産業論が、これまで十分に展開されてこなかったことは、素人同然の若手に地元テレビ局から出演依頼が舞い込むようになったことから証明される¹¹。

このような観点から見直してみると、北海道という場所はメディア論にとって実験的な場所である。地域が広く地元テレビ局は、他の都道府県とは比較にならないほどたくさんの中継局をおかなければならず、地上波のデジタル変換を進める体力がなければ淘汰が避けられないと囁かれている¹²。一方、体力のある局は番組の自社制作比率を23%程度にまで高め、東京でも通用するようなコンテンツを生みだしている例がある。地方メディアにとっての生き残り方策は何か、ということは北海道メディア論の最初のテーマであろう。

そこで2002年度「現代メディア論」の授業計画としては、地元メディアの現場で活躍している方々をゲスト講師として招聘するなど、学生たちが身近に感じられるばかりでなく、

北海道におけるメディア論の成熟に資するような授業展開を工夫してゆきたい。2002年3月2日に開催された「社会情報調査の方法に関する研究会」でローカル・メディアがテーマとして取り上げられたことも、このような方向での試みの一つと位置づけることができる（本号参照）。

4.2 メディア・リテラシーの認識論

当初は、いわば「隠れたカリキュラム」(Hidden Curriculum)としてメディア・メッセージに対する批判力をつけてもらう目的を持っていたし、2000年シラバスにも「メディアに対する批判力」という言葉は慎ましやかに書いてある。批判力をつけるために必要な限りでVTRを利用することは当初から考えていたものの、映像素材を流すことで講義時間を消費することは教師としての墮落ではないかという気持ちがあり、それほど多用するつもりもなかった。しかし、講義形式の産業論よりもVTRを利用したメディア批判的内容の方が学生の反応が良いことから、2年目にあたる2001年度の授業からはメディア・リテラシー養成を前面に打ち出すことにした。それに何よりも、本気で準備すればビデオを利用する授業にはかえって手間がかかり、墮落にはあたらないことも分かってきた。1節にも述べたように、「学生のお守り」とか「手抜き材料」としてVTRを使うから批判されるのである。

2001年度、講義形式のイントロダクションののち最初に見てもらったVTRは、NHKスペシャル『ムスタンの真実』である。周知のようにこの番組は、ヒマラヤ山中の秘境を紹介したものとして当初大きな反響を呼んだが、翌93年になってから主要部分が「やらせ」であることが発覚、社会問題化したものである。撮影に同行していたカメラマンの小松健一が告発書を出しているほか(小松,1994) 渡辺武達も論文中に取り上げているなど(渡辺,1995) 授業を組み立てる上での参考資料も多かった。そして幸い、本学LL事務室には『ムスタンの』のビデオが保管されていた。そこで授業では、まず番組を通してもらい、「やらせ」がどこにあるか探しながら見てもらった。これに対しては、次のような感想があることから、学生たちはそれまで一種の刺激反応図式に則ってテレビ番組を受容していたことが分かる。

この講義を受けた事によって、テレビの見方が確実に変わった。すべての情報をそのまま受け入れるということが少なくなった(2001年度最終回の感想、3年男)。

次の週に種明かしをして、文献から明らかな「やらせ」の箇所に加え、私自身の分析も含めて、数十カ所の不自然な箇所を、いちいちビデオテープを一時停止させながら説明した。この内容に対する反響は大変大きく、一年を終えても次のような感想が多かったほどである。

ムスタンの話がおもしろかったです(2001年度最終回の感想、3年女)。

このムスタンの事例からテレビと商業主義とは切り離せないこと、番組は「事実の選択」「編集」「演出」など様々なプロセスを経て仕上がっていることなどを説明する。そのうえ

でテレビの視聴率主義をテーマとした2本の映画(『クイズ・ショウ』『破線のマリス』)を見てもらうと、学生たちはメディア情報を弾丸のように受容する姿勢を多少改めるようになる。

この授業を受けて、報道などメディアに対する見方がずいぶん変わったと思う。今まで自分はどれだけ受け身で情報を受け止めてきたのだろうと思った(2001年度最終回の感想、3年女)。

このように学生たちがメディアの商業主義に目覚め、授業に興味を持ち、ビビッドな反応をかえしてくるようになったことは、それなりに嬉しかった。しかし、毎回返却されてくる感想を読むうちに、嬉しさより悩みが深くなるのに時間はかからなかった。学生たちはメディアを一方向的に批判するあまり、こんどは権力によるメディア規制をナイーブに支持するようになってしまうのである。メディア・リテラシーに関する授業は一步間違えると、単にメディアに対する不信感を増幅させることで終わるとするのは、ほろ苦い発見だった。このような態度の一因は、自分たちは受け手にすぎないと自己規定していることにあるだろう。次のような感想に典型的である。

しょせん受け手でしかない自分たちにとって、作り手の立場というのはよくわからない(2001年度前期の感想、4年男)。

このようなリアリティを持っている学生に、いかに受け手主義ではなく能動的な態度を身に付けてもらうか、これは北海道の私大で教えている限り切実な課題でありつづけるだろう。北海道の私大と限定をつけたのは二つの意味がある。第1に、北海道は情報の輸入超過に陥っている地域の一つだということだ。少しでも作り手の立場から説明を始めると、学生たちは能面のような表情を見せる。作り手の立場というのが想像できないようなのである。たしかに夕方の地元ローカル番組はいくつかあるが、それでも学生にとって身近なドラマやバラエティ番組の作られる現場が東京に集中している以上、当然のことかもしれない。第2に、物事を疑うという姿勢をあまり教えられてきていないため、一回情報を相対化すると、今度はいつまでも相対化することになってしまい、バランスがとれない。さまざまな情報を自分の中で整理し咀嚼するということは、単一の授業だけで訓練するには限界があるのだ。消化不良に陥った学生は、もとの刺激反応的な受容態度に戻るか、すべてを疑うかという二者択一になってしまうことがある。次のような感想がある。

すべてを疑うようになるとテレビを見ていても面白くないので、これからも知らないふりをしようと思う(2001年度前期の感想、3年男)。

メディア・リテラシーの理論はこうした問題についてどんなアドバイスができるだろうか。管見の限りではあるが、いまのところ既存の理論から明確な回答は見つからないように思う。これまでのメディア・リテラシー論はあくまでも、メディアを批判的に見る手法とか、メディア製作経験をさせることに重点が置かれているからである。受け手の認識の地平をどう変えていくかというような、より内面的な方法論には光が当たっていないのである。たしかに、新しい認識論を求めなければならないということはレン・マスターマン

の「メディア・リテラシー18の基本原則」(<http://www.mlpj.org/masterman.html>)で言われているけれども、具体的な認識論の内容には踏み込めていない。メディアはナイーブな意味での真実を伝えていない、ということを理解させることは重要である。しかし、現場と情報との間でバランスをとりながら、よいコンテンツを正当に評価できるような能力を身につけさせること、それこそが新しいメディア・リテラシー論の課題であり、新しい認識論の構築ではないだろうか。

5. まとめにかえて

以上、『情報メディア論』2年間の実践についてまとめてきた。今後の展開として、4節で論じたような北海道のメディア産業論と、メディア・リテラシー論とがうまく結びつければよいと思っている。幸い、UHB(北海道文化放送)が毎年メディア・リテラシー関係の番組を継続して制作してゆくということなので、この番組作りに協力しつつ、授業にも成果を反映させてゆきたい。

今後の目標の一つとしては、映像素材のデジタル化作業があげられるが、これには2002年春から着手している。映像素材をデジタル化しておくことのメリットは、とくに細切れの画像を見せたい場合に、教員側で事前に編集しておけることである。次のような感想が見られるように、アナログビデオでは操作に手間取ったり当初の予定通りに進まなかったりすることがある。

ただひとつ言えるのは、プロジェクター、VTR等々、教室の基本的な使い方が悪い(2001年度最終回の感想、3年男)。

このように、一口に映像素材を利用するといっても、そこには多様なノウハウがあり、とくに最近であれば情報技術との連携が模索されたりしている。恥を忍んで失敗も含めた私の実践を紹介したが、このように教育方法に関する情報が共有され、議論が深まる必要があると思う。また、4節で紹介した講義内容は、札幌学院大学という特殊性のなかで成立する講義案であるが、このように特定の文脈に即した授業設計を考える必然性は、これからますます高まっていくのではないか。

2002年度から講義名は『現代メディア論』となるが、学部教育カリキュラムのなかでの位置づけを考えつつ、賢い audience を育て、多様な解釈を生みだし、市民社会の健全さを維持するにはどうすればよいのか試行錯誤を続けていきたい。

(謝辞) この授業に使用したノートブックパソコン、および映像素材のデジタル化作業に要する費用の一部は、2001年度札幌学院大学社会情報学部理系教員プロジェクト助成金によるものである。また、ビデオ素材の検索や録画などに協力して下さるLL事務室の荒尾さん、毎週の感想カードを電子入力するアルバイトをしてくれた斉藤宏平君に感謝します。

文献

- 有馬哲夫 (1997) 『テレビの夢から覚めるまで アメリカ 1950 年代テレビ文化社会史』国文社.
- 後藤将之 (1999) 『マス・メディア論』有斐閣.
- 小松健一 (1994) 『ムスタンの真実』リベルタ出版.
- 香内三郎ほか (1993) 『メディアの現在形』新曜社.
- 坂元昂監修・文部科学省メディア教育開発センター編 (2001) 『教育メディア科学 - メディア教育を科学する - 』オーム社.
- 鈴木みどり編 (2000) 『Study Guide メディア・リテラシー [入門編]』リベルタ出版.
- 山中速人編 (1993) 『ビデオで社会学しませんか』有斐閣.
- 渡辺武達 (1995) 『メディア・トリックの社会学』世界思想社.

¹ 2000 年度後期末に学生自治会が行った授業アンケートの自由解答欄には次のような声があった。何を書いたらいいかわからないレポートより、書くことがはっきりしている方が意欲がわく。

² これが役に立ったのが、2001 年 9 月 11 日の同時多発テロ事件のときである。事件直後からビデオテープを回しっぱなしにしたが、その中に、あとで素材にする重要な録画が含まれていた。それは、「NY テロ事件を聞いて喜びクラクションを鳴らすパレスチナ人」の映像であり、ロイター通信によって撮影され CNN が放映したものである。これは世論形成に一定の効果を持つ映像といえるが、それが真実であるという証拠はどこにもないこと、夕方の画像にしては不自然に背景が明るいことなどを、授業で説明した。CNN 自身はこの画像は真実であると主張しているが

(<http://www.cnn.com/2001/US/09/20/cnn.statement/index.html>)、この映像が人々の目に触れたのは、結局事件当日だけである。

³ ただし、ビデオキャプチャーカードを介してハードディスクに取り込む実験を試みたところでは、性能の限界があっても必ずしも鑑賞に堪える画像クオリティではない。強引に鑑賞に堪える画質にまで高めようとすると、ファイルサイズが巨大化してしまう。やはりデジタル・ビデオテープ機器を利用することになるのだろうか。

⁴ 以下の学内文書による。佐藤和洋, 2001/11/23 「D 館 2 教室、C 館 3・4 階及び G 館ラウンジ等情報環境設備仕様書(案)」。

⁵ このプロセスは情報技術の高度化により省略可能かもしれない。つまり、授業中に Web を参照できるようになれば、それで代用できるかも知れない。

⁶ この日の授業後感想には、次のようなものがあった。「授業の価値がすごく高いです」(4 年男)

⁷ 次のインタビューのなかでの中曽根康弘の発言を参照。

<http://www.sankei.co.jp/pr/seiron/koukoku/2001/ronbun/04-r4.html>

⁸ 私の場合、いくつかのメーリングリストやメールマガジンからネット上の動きに関する重要な情報を得ることが多い。

⁹ その前年度の担当者が指定していた教科書『メディアの現在形』(香内ほか, 1993) もまた、このような業態別解説というスタイルをとっている。

¹⁰ 2000 年度前期の授業教材は (<http://sinfo.sgu.ac.jp/~nakazawa/media/>) に.ppt ファイルとして掲示してある。

¹¹ これまで札幌テレビ STV の 2 つの番組 (2001 年 4 月 1 日放送の「ハイ S 会議」、2002

年3月31日放送の「ハイS会議拡大版」)、北海道文化放送 UHB の二つの番組(2001年9月24日、2002年5月5日放送の「こどものテレビ学」)に出演した。

¹² こうした点については、次のような文献を参照。『月刊民放』2000年12月号(特集・21世紀の民放経営～地方局生き残りの条件!)、『週間東洋経済』2001年11月24日号(特集・テレビが危ない) など。